法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

<文献紹介>米家志乃布著『近世蝦夷地の地域情報　日本北方地図史再考』

HAMADA, Hiroaki / 浜田, 弘明

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
54
(開始ページ / Start Page)
85
(終了ページ / End Page)
86
(発行年 / Year)
2022-03-20

【文献紹介】

米家志乃布 著　（2021 年 5 月発行）
『近世蝦夷地の地域情報　日本北方地図史再考』
法政大学出版局 , 250 p, 定価 2,900 円（＋税）

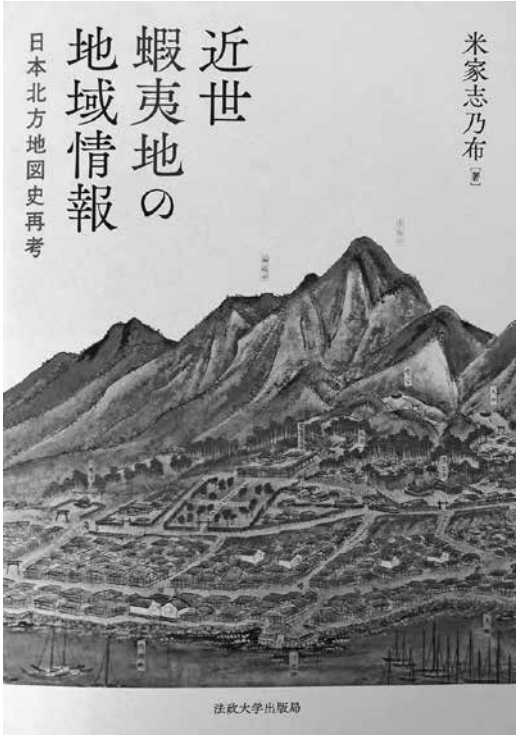
本書は，膨大な地図・絵図・風景画などの図像資料調査に基づき，日本北方地図史の先行研究を踏まえ，近世の蝦夷地が明治を迎え，どのようにして北海道となったのかについて，明らかにしようとしたものである．蝦夷地が，19 世紀前半と半ばの二度にわたり，幕府の直轄地として中央の和人権力により支配されたことを「植民地化」する前段階と位置付け，「植民地化」の手段として蝦夷地に関する地図作成や地域情報の収集があったとの指摘は大変興味深い．

また，ネイティヴ・アメリカンが，イギリス人植民者たちの地図作製作業に協力した結果，自分たちの土地を奪われるという「皮肉」を生んだとする，アメリカの地図史研究者 J・B・ハーリーによる指摘が，蝦夷地・北海道支配にも共通するという見方についても興味を惹かれる．

著者は，本学会員であり紹介するまでもないが，歴史地理学を専門とし，法政大学文学部地理学科教授を務めている．「あとがき」にも記されているが，本書のテーマとなっている蝦夷地・日本北方地域の研究は，著者の博士論文（『日本北方地域の歴史地理学的研究 ── 「蝦夷地」から「北海道」へ』）を原点としたものである．

本書は二部構成となっており，章立ては以下のとおりである．

はじめに
第一部　日本の歴史空間と「蝦夷地」
第一章　ヨーロッパおよびロシア作製の地図にみる蝦夷地像
第二章　日本図からみる蝦夷地像の変遷
第三章　日本図・蝦夷図にみる庶民の蝦夷地像
第二部　「蝦夷地／北海道」における地域情報の収集と表象
第四章　日本における蝦夷図作製と地域情報
第五章　松前藩・江差沖の口役所収集の絵図にみる地域情報の把握
第六章　東北諸藩の蝦夷地沿岸警備と地域情報の収集
第七章　松浦武四郎による地域情報の収集とアイヌ民族
第八章　日賀田帯刀の風景画にみる蝦夷地／北海道像
第九章　植民都市・札幌の風景と植民地としての北海道像
おわりに ── 日本北方地図史を再考する



本の表紙カバーは，北海道大学附属図書館所蔵『北海道歴検図』の「渡島州西岸（上）箱館北画」がカラー印刷されていて，目を引くものとなっている．また，本文中には，総計 67 点に及ぶ絵図や風景画が挿入されており，本文理解の助けとなっている．以下，著者の視点から全体構成を眺めてみることにしたい．

第一章では，ヨーロッパやアジアで作製された地図上に，日本と蝦夷地がどのように描かれてきたのかについて，先行研究をまとめる中から，そこで取り上げられた地図やその論点を明らかにしている．欧米やロシアで作製された地図も，18 世紀まで日本北方地域の蝦夷地や樺太は，不正確な形で描かれており，日本で作製された地図もその影響を色濃く受けている．

第二章では，蝦夷地を中心とした北方諸地域が，どのように日本の国土に組み込まれていったのかについて，近世に作製された日本図をもとに説明している．地図史上では，蝦夷地が北海道と名称変更される以前から，日本図の中に蝦夷地を組み込む試みがなされており，その具体的な描き方の変遷を明らかにすることを通して，日本と蝦夷地像の関係を明らかにしている．その一方で，庶民が利用した民間の日本図においては，蝦夷地が描かれたものと描かれていないものと

が混在していた．

第三章では，庶民の蝦夷地像がどのようなものだったのか，庶民層の多くが目にすることのできた刊行図や節用集所載の地図を素材として，各地図に描かれた蝦夷地の表現を明らかにしている．また，ここでは，日本北方地域を意識している幕府の「知識人層」と，そうではない民間の「庶民層」の間にある地理的認識の差異についても言及している．

第四章では，松前藩と幕府によって作製された絵図や地図と，地域情報の収集活動の関係について概観し，蝦夷地／北海道における地域情報の収集と表象について論じている．ロシアが南下し，領土獲得競争が進む中で，第二次幕府直轄期となる幕末，藩や幕府が蝦夷地の地域情報の収集とともに，絵図や風景画などの画像情報に注目していく様子が見られる．

第五章では，蝦夷地への玄関口であった松前藩・江刺沖の口役所に備えられた西蝦夷地沿岸部を描く「江刺沖ノ口備付西蝦夷地御場所絵図」(25 葉）を事例に，幕府及び松前藩の政治権力と絵図の関係性について検討し，絵図に描かれた蝦夷地像と絵図群が政治的に存在した意義を明らかにしている．

第六章は，第二次幕府直轄期に蝦夷地警備を命じられた秋田藩と盛岡藩を事例として，それぞれの藩が作製した西蝦夷地・東蝦夷地の絵図に描かれた地域情報と蝦夷地像について検討している．各藩は，それぞれの利用目的に合わせて蝦夷地沿岸の地域情報を収集し，絵図や風景画を作製し，活用していたことが明らかにされている．

第七章では，先のハーリーの言葉に始まり，松浦武四郎という人物とアイヌの人々との関係を考察している．ここでは，蝦夷地探検家として知られ，幕末に最も多くの蝦夷地関連地図・地誌を作製している松浦武四郎の地誌の一つである『天塩日記』を事例として，彼が作製した天塩川流域の地域情報の中に，先住民であるアイヌの人々の空間的情報が記録されていることを明らかにしている．

第八章では，第二次幕府直轄期に蝦夷地検分を行った幕府役人である目賀田帯刀が作製した風景画集『北海道歴検図』を事例として，蝦夷地の地域情報の収集，描かれた地域像の特徴，情報活用のあり方を考察している．ここでは，地図だけではなく風景画も，政治権力による地域情報把握の一手段として，大縮尺の地域図と同様の役割を果たしたのではないかと論じている．

第九章では，明治初期に開拓使お抱えの絵師が描いた風景画「明治六年札幌市街之真景」を素材として，開拓使が表象された「植民都市」札幌の風景について論じている．風景画だけではなく，同じ作者が作製した地図類や，開拓使が撮影した写真類などの図像とも比較し，風景画に表現された「植民地」北海道の中心都市である札幌について言及している．

戦前からの北海道史研究は，開拓に視点を当てた言わば拓殖史観が主体であったが，本書では，サブテーマにあるように日本北方地図史を再考し，従前の北海道史観とは距離を置いて，内国植民地支配の道具として地図を捉えている．その上で，日本の歴史的・空間的領域が拡大・深化し，蝦夷地という「異域」が日本の「国土」に編入され，新たな国土空間が生み出されていく過程を明らかにしている．

蝦夷地／北海道という一地方に絞った研究ではあるが，自身も述べているように，単なる一地方史・一地域史に止まらず，日本という歴史空間を問い直すものでもあると言えよう．さらには，歴史地理学の学術書ではあるが，アイヌ問題や日ロ外交，領土問題を考える上でも，参考にすべき一冊であると考える．

（浜田弘明）